

など、閣下以下二百人が最後にトラック島を後にし、二月十八日、神奈川県三浦の浦賀港に上陸しました。ここで検疫後、部隊は解散となり、二月二十三日に帰宅しました。両親は大変な喜びようでした。

現在、長男は家業の農業の後を継ぎ、次男は名古屋に、長姉は埼玉に在住して元気にしています。私は不運にも交通事故に巻き込まれ、脚部に傷を負い、少し歩行に支障をきたしておりますが、大事を取りながら、今なお頑張っております。

## 南方海上で六時間の漂流

長崎県 佐藤 義 教

私は大正十二（一九二三）年五月二十八日、長崎県南高来郡安中村（当時）の農家に、六人兄妹の長男として生を享けました。家業の農業の主たる仕事は煙草耕作業で、その合間に一本釣りの漁業も兼業しておりました。多忙な両親に育てられ、昭和十二（一九三七）年三月、安中尋常小学校を卒業し、上級学校への進学を両親にお願いしましたが、「子供が多く多忙できりぎり舞しているのに、お前が加勢してくれねばどうするか、すまんが進学はやめてくれ頼む」との両親の願いに断り切れず、農業の手伝いをすることにしました。その傍ら地元の青年学校に週二回午後から通学することになりました。

支那事変も激化し、昭和十六年十二月八日には太平洋戦争が勃発し、連戦連勝のニュースに血湧

き肉躍るの感激いっぱい、青年学校に通学しました。青年学校では主に軍事教練及び軍人として、精神面と肉体面の教育によりいつでも役に立つような訓練が行われました。教官は少年として勤務出来る兵科を、志願するように毎日勧めていました。

昭和十七年六月、青年学校の教官が「佐藤、お前も海軍を志願してはどうか」と、勧めてくれましたが、家庭のことを考えますと返事に困りました。しかし仲間十人ぐらいが志願しようといひ出しましたので、両親にも相談せずに志願することに決めました。

十二人が指定された試験場で受験し、身体検査と学科試験が行われました。後日合格の通知を受け取ったのは三人のみでした。

私に合格通知が来ましたので、両親に報告しますと、両親はびっくりして「この忙しい中に親にも相談せずに何たることか、家は早速困るではないか、志願せずとも、来年は徴兵検査ではないか、

それを受けてからでもよかったではないか」と父親は大きな声で叱りましたが、当時の一般の空気は、お国のため、自分の家から出征兵士を送り出すことを名譽と考えておりました時代だけに、両親もそれ以上のことはいわず承知してくれました。

入団を待っているうちに年は明けて、昭和十八年二月、徴兵検査を受け甲種合格を言い渡されました。これで両親も納得してくれました。それから間もなく四月二十日、佐世保海兵団に入団せよとの通知がきました。志願しておりましたので同級生より早く入団することになりました。両親をはじめ弟や妹達、親戚や近所の方々から「しつかりがんばれよ、身体に気をつけて」と激励を受け、一人で佐世保海兵団に向け出発しました。

戦況の厳しい中二度と帰ることはなからうと思えますと、思わず涙が頬を濡らしました。昭和十八年四月二十日、佐世保第二海兵団に入団、いよいよ海軍水兵としての生活が始まりました。

規律正しい生活は厳しく、話には聞いておりま

したが大変な毎日でした。幸い私は農家で体力的には鍛えており、青年学校で軍事教練を受けていましたので、他の人のように苦痛は感じませんでした。三カ月間の初年兵教育はあつという間に過ぎ、七月には一等水兵に進級しました。

上官に、千葉県館山市の砲術学校で勉強させて下さいとお願いしましたが、上官は「貴様達は一日も早く最前線に行き、御国のために頑張つてくれ」と言われて、砲術学校への入学は許可されませんでした。命令は巡洋艦「足柄」に乗船することでした。

巡洋艦「足柄」はシンガポール方面で活躍中であつたため、輸送船「興安丸」でシンガポール港まで移動することになり、十月末日佐世保港を出港しました。乗船したのは、私達初年兵二十人の他に下士官たちや慰問団が乗船した賑やかな出港でした。この慰問団の中には藤山一郎さんもおられ、シンガポール港までの十日間船内で歌も発表され楽しい毎日でした。

このころ、航路はアメリカの潜水艦攻撃も激しくなりつつあり駆逐艦一隻が護衛の伴走をしてくれましたので、安心感がありました。船上から敵潜などの監視は交代で続けられました。途中バシー海峡の荒波で船酔いする人もおりました。

十一月十日、無事シンガポール港に入港、停泊中の巡洋艦「足柄」に乗艦しました。さすがに一等巡洋艦「足柄」は立派で大きく、乗組員も約千人と聞きました。当時の南方各戦線は、日本軍には不利な状況下にありましたので、毎日の艦上訓練は驚くほど厳しく、佐世保海兵団での訓練どころではありません。軍歌に歌われているように「月火水木金」と日曜日なしの厳しい訓練が続けられました。とくに南方作戦で日本の大切な軍艦が次々と撃沈されていると古兵から聞きましたが、シンガポールの港にも軍艦らしい船は、あまり見かけませんでした。

「足柄」の任務はインド洋からマレー海峡の周辺の海上警備で広範囲にわたり、連日巡回航海で

した。私は二〇センチ砲の五番砲座の勤務でした。艦上では敵機や敵艦と遭遇した場合を想定しての厳しい訓練が続行されました。

私達初年兵は、士官の従兵を命ぜられ、士官の食事をはじめ、衣服の洗濯、手入れ等の世話もしなければなりませんので、それはそれは大変な苦勞で、時には就寝が夜中になることもありました。

昼間はみんなと一緒に激しい訓練を続け、夜は勉強する暇もなく、従兵としての勤務に一生懸命でした。南方の暑い気候の中での訓練と従兵勤務に歯をくいしばりながら頑張りました。幸い島原出身の脇山上等水兵がおられ、励まされました。

作戦行動は私達には何も知らされず、戦況がどのようになっているのか分からないまま、艦上訓練は続けられました。

昭和十九年三月、修理のため佐世保港に入港しました。四カ月ぶりの佐世保港でした。一週間ぐらいで修理を終え、今度は北方警備の任務を帯びて、青森県の大湊港に配備されました。暑いシン

ガポール方面から一転して日本の北国青森県で、四月といえ肌寒い毎日、一カ月近くこの北方警備に従事しました。五月になって任務を解かれ広島県の呉港に入港しました。

呉港では、南方作戦に備え、甲板の周囲にハンモックを結び付け対銃撃戦用に準備し、南方に向け出港しました。佐世保港、大湊港、呉港などに寄港はしましたが、上陸することはなく、内地の実情がどうなっているのか分かりませんでした。

そして南下中にハンモックの取りはずしを命ぜられました。理由はハンモックの色が白いので標的になりやすいとのことで、折角縛りつけたのに、といながら取りはずしました。幸いアメリカ空軍機にも潜水艦にも遭遇することなくシンガポール港に入港し、引き続きインド洋やマレー海峡周辺の警備と、陸軍部隊の移動護衛に活動しました。

昭和十九年十月二十四日、レイテ海に集結を命ぜられて急行、レイテ海に到着したときには夜中でした。米軍の艦砲射撃が激しく、被弾した軍艦

が燃えているのでアメリカの軍艦がと見ておりま  
したら、日本戦艦「日向」らしいと教えられまし  
た。

暗い夜中に日米両軍艦から発射される砲弾は激  
しく、アメリカ軍の優秀な電波探知器や物量には  
日本海軍もどうすることも出来なかったようで、  
巡洋艦「足柄」は一発も発砲することなく、命令  
により後退せざるをえなくなりました。

この作戦は十月二十日、アメリカ海兵師団がレ  
イテ島に上陸したのに対抗して、レイテ島守備の  
日本軍に部隊の増援を行うため、海軍部隊も戦艦  
「大和」「武蔵」を始め残存軍艦を動員しての海戦  
だったそうです。しかしこのレイテ海戦の敗北に  
より日本軍は制海空権を失い、増援部隊を乗せた  
輸送艦は大部分が輸送途中で沈められ、一戦も交  
えることなく貴重な軍艦が海の藻屑と消え去った  
と、後日聞き残念に思いました。また戦艦「武蔵」  
はこの海戦で航行不能になり、日本の軍艦により  
撃沈されたとも聞きました。

不沈艦といわれ日本海軍が世界に誇る「武蔵」  
さえ、アメリカ軍の物量の前には手の施しようも  
なかったのかと残念に思いますと同時に、日本は  
大丈夫かなあと不安になりました。貴重な軍艦を  
一隻でも残そうとの命令で退去を命ぜられたお陰  
で「足柄」も私達も命を長らえることが出来たと  
感謝しつつインド洋からマレー半島付近の警備勤  
務を続けました。

昭和二十年六月八日、陸軍部隊五百人ぐらいを  
乗船させて移動中、バンガ海で島陰に隠れていた  
イギリスの潜水艦が発射した魚雷が、右舷脇に四  
発命中し、船が横揺れしたと思った瞬間、火薬庫  
が爆発し、見る見る中に沈み始めました。さあ大  
変「救命具を海へ投げ込め」「海へ飛び込め」の大  
騒ぎとなりました。

ざぶんざぶんと海に飛び込む者、「退艦！退  
艦！」と呼ぶ者、その退艦の声に陸軍の兵隊達も  
銃を持ったまま海へ飛び込む。海軍の水兵達も  
次々と飛び込む。先に海に投げ込んだ救命具や救

命筒に捕まり泳ぐ。私は後部の五番砲座にいましたので救命筒を結んである紐も切って片っ端から投げ込んでやりました。

艦首から突っ込んだ艦は四五度ぐらいに傾斜していますので、渦に巻き込まれては助からないと考え、軍服のまま飛び込みました。魚雷が爆発してから十分ぐらいで「足柄」の姿は海に水没してしまいました。艦長の三浦少将も船底勤務の同僚達も、電気が消えた暗闇の艦内で艦と運命を共にしたことが残念でした。この間僅か十分間の短いこと、さすがに陸海軍の軍人だけに動作の早いことには感心しましたが、助かった者は陸軍二百五十人ぐらい、「足柄」乗組員約千人、いずれも半数の者しか助かりませんでした。特に艦底に勤務していた人達は一人しか助かっておりません。海に飛び込んだ者はそれぞれ掴まれる物に掴まり、離れないようにして立ち泳ぎしました。

陸軍の兵隊たちは銃を握り、片手で器具に掴まり泳いでいるので、目に付いた兵隊には「銃を捨

てなさい！自分が死ぬぞ！」と叫び、銃を捨てさせました。菊の紋章が付いている歩兵銃をしつかり持っている兵隊さんに頭が下がりました。「みんな軍歌を歌え、元氣を出せ」と呼びつつ、軍歌を歌い泳ぎ続けました。

私は泳ぐことに自信がりましたが、救命具に掴まっておらねば長くは泳げないと思い、しつかりと救命具を握りしめ泳ぎました。そして「離れては駄目だぞ！ 歌え歌え！」と叫び続けました。広々とした南方の海。どこの海か分かりませんが、助かるまで泳ぐぞ、ただそれだけでした。いや私ばかりではない。みんなその決意で一生懸命であろうと思いました。心配なのはアメリカの空軍機に発見され、また鮫に襲われないだろうかという心配でした。燦燦と照りつける太陽、青々とした海原、あちこちから聞える軍歌、みんな死に物狂いで、溺れる者は藁をも掴む心境でした。

夕方になって一隻の軍艦を発見しました「きたぞ、助けの軍艦が来たぞ、頑張れよ」の声があち

らこちらから湧き上りました。日本の駆逐艦「神風」の姿でした。その時の嬉しき、喜びは言葉ではいい尽せない感激でした。

駆逐艦「神風」は日露戦争時代に活躍した古い軍艦で、イギリスの潜水艦から「足柄」が魚雷を受けた時は大事をとって一時退避していたので無事でした。「神風」に向って助けてもらうため、みんなが必死に泳ぎました。昼間から泳いでいるので腹はペコペコです。それでも生きるために、助かりたい一心から、「おーい！おーい！」と叫び、それこそ死に物狂いで、みんなと離れない、励まし合いながら泳ぎ続けました。

南方の青い海の六時間余りの漂流は大変でした。そして「助かった、助かった」とみんな喜びいっぱいでした。小さな駆逐艦に助け揚げられた数百人の陸海軍の強者達、坐ったまま足の踏み場もないくらい艦上は人の山でした。敵機にも発見されず、鯨にも襲われず無事救助されてよかったですと手を合わせました。

僚船巡洋艦「羽衣」がインド洋で敵潜水艦の魚雷により沈没した時は、漂流中の乗組員の群れは、浮上した潜水艦が突っ込んで来て、泳いでいる水兵達を銃撃する、棒で叩くの暴行を加えたと聞いていたので、我々も二の舞になるのではないかと心配しましたが、幸い敵の潜水艦も浮上せず助かりました。沈みゆく夕日を眺め、疲れのために眠ってしまいました。

翌日昼ごろ、無事シンガポール港に入港、腹がペコペコ、ふらふらしながら上陸、仮兵舎にたどりつきました。食事に出されたのは乾パン三枚でした。前日の昼食も夕食も今日の朝食も食べておりませんでしたから、その乾パン三枚のおいしさは言葉ではいい尽せないほどでした。

軍艦を失った私達は、シンガポール第一〇一警備隊付を命ぜられ、森の中での防空壕掘りが毎日の仕事でした。防空壕を掘りながら一年半の軍艦「足柄」での思い出が頭の中を駆け巡りました。当時は厳しい訓練を受けつつも勝利を目指すとい

う希望があつたのに、その希望も「足柄」と共に  
なくなりました。沈みゆく「足柄」から海へ飛び  
込む悲壮な姿、「足柄」と運命を共にした三浦艦長  
と多くの戦友達、泳ぎながらも銃を離さない陸軍  
の兵隊達、戦争の悲惨さをまざまざと見せつけら  
れ、悔しい涙をどうすることも出来ない毎日です  
た。軍艦を失つた私達が防空壕掘りをさせられる  
ことで、戦況の不利を感じました。

突然、防空壕掘りの中止を命ぜられ兵舎に帰り  
ますと、上官が書類を燃やしており、「何事です  
か」と尋ねますと「戦争は終わった負けたよ」と  
教えられ、へなへたと座り込みました。その日こ  
そ忘れ得ない八月十五日でした。口々に戦争は終  
わった、負けたぞといひ皆残念そうでした。  
この日から様子は一変しました。私達はマレー  
半島のバドババーという所に集結を命ぜられ、捕  
虜という汚名を着せられた捕虜生活が始まりまし  
た。そして小さなコップに僅かな粥が与えられ土  
方作業を強いられました。暑い中での土方作業、

少ない僅かのお粥、体重はみるみる減少しました。  
腹が減って土方作業どころでなく、休んでおると  
働け働けとせき立てる。特に黒人兵が威張って言  
うので、腹が立って反抗しました。するとこちら  
へ来いと命令するので私は渋々ついて行きました。  
反抗したから殺されるのではないかと心配してつ  
いて行きますと、学校の所で「ここで休んでおれ」  
と休ましてくれたのでほっとしました。

後で聞いたことですが、「佐藤は殺されるので  
はないか」とみんなが心配したそうです。士官学  
校のところまで元気である私の姿を見て、「佐藤は  
無事だったか」と仲間が喜んでくれたとのことで  
した。

腹が空いて、毎晩食事の夢ばかりみました。そ  
して捕虜生活を恨めしく思いました。私達の捕虜  
収容所は海軍関係の人達ばかりのようでした。イ  
ギリス兵にも情深い人、横暴な人がおりましたが、  
苦しい時の親切さは忘れることはできません。情  
報が分からないまま敗戦後日本はどうなっている



のだろうかと心配しながら毎日黙々と土方作業に従事しました。

昭和二十一年六月十日、日本への帰国を知らされました。日本へ帰れる、捕虜生活から解放される嬉しさがあふれました。僅かばかりの荷物をまとめましたが、めぼしい物は取り上げられてしまいました。

六月十二日、数百人の兵隊達を乗船させた復員船はシンガポール港を出港しました。昭和十八年十一月、軍艦「足柄」に乗艦して何回となく入港を繰り返した「足柄」が撃沈され、駆逐艦「神風」に救助され入港した港でした。この思い出深いこの港ともお別れかと思わず知らずに涙が流れました。

復員船には混成部隊が乗船していましたが、東北の方々が多く九州の人は少なかったようでした。船の中ではやせた体をごろごろさせ、シンガポールでは長崎に大変な爆弾が投下されたと聞きました。そして島原はどうなっているか、故郷に思い

を馳せ、給料から三十円を二回送金したが届いたか、手紙は届いたのだろうかとか我が家の安否を考えていました。

「足柄」に祀られていた足柄神社に戦友と共に参拝していると、「配置に付け！」の号令で、自分後方の大砲の砲座に走ったが、戦友は魚雷の爆発により戦死してしまつた。僅かの分秒の差で生きた者、死んだ者、戦争は恐ろしいものだ。にも拘わらず二〇センチの大砲の砲手として一発も実弾を発射することなく、英軍潜水艦の四発の魚雷で沈没した「足柄」の姿を思い起し、無念の涙が出ました。

六月二十三日、「日本の港に着いたぞ！」の声に、一斉に甲板に集まりました。どの港か分からないが日本に無事着いて例えようのない嬉しさでした。上陸してみても名古屋港と分かりました。そして飛行場の近くの建物に収容され二晩過ごし、そこには掲示板に島原も空襲を受けたと書いてあるのにびっくりしました。

六月二十五日、旅費三百円をもらって部隊は解散となりました。家に電報で知らせようとしまずと、電報より着く方が早いですよといわれ、名古屋駅から九州に向う復員列車に乗車しました。

門司駅で下車しますと、戦災孤児でしょうか、うようよしていて私に乾パンを持ってないかと手を合わせるので、名古屋でもらった乾パンを子供にやりました。また、あんこが入っていない買った饅頭をやりますと喜んでくれました。こうして名古屋でもらった三百円は諫早駅までの切符代でなくなっていました。

諫早駅で島鉄列車に乗りますと、朝鮮人が威張り散らして我が物顔に車内でわめいていましたのにびっくりしました。これも敗戦の結果かと情けなく思いました。安徳駅で下車して我が家に駆け込みますと、両親を始め家族の者が「生きて帰ったか」と、私の元気な姿に涙を流し喜びました。

シンガポールから鉛筆で走り書きで出した手紙が最後で、生きて帰ろうとは夢にも思っていないか

ったと大喜びで迎えてくれました。また隣近所の方々まで「よかった、よかった、おめでとう」とお祝いに来てくれました。仏壇に向かつて無事帰って来たことの報告をしながら南方の海を懸命に泳いでいた自分の姿を思い出しご先祖様のお陰であつたとお礼をしました。そして早速家業に従事しました。

戦争による人手不足でこの田畑も荒れ果てており、復元に苦労しました。島原が空襲を受けたこと、通産省の酒精工場がグラマン機の銃撃を受け、倉庫が燃えたものの被害は軽微であつたと聞きました。

そして農業協同組合、漁業協同組合に勤め、戦場で命を捨てたつもりで頑張り、八十二歳になる今日まで両組合の理事をしております。二度と戦争の悲劇を繰り返してはならないと心に念じ、老骨に鞭打ち頑張っております。

平成三年五月から六月にかけての雲仙普賢岳の大噴火により、家と共に貴重な資料を流失しまし

たので、正確な日時と地名を申し上げることが出来ず残念に思います。

### ソ満国境からサラワテイ島警備へ

福岡県 大坪 正 保

私は大正十一（一九二二）年九月九日生れの八十五歳、物忘れの老境に入り大方の記憶が定かではなく、大切にしてきた軍隊手帳も数年前に焼失してしまいました。思い出すままをお話しますので事実と異なる思い違いも多いと思います。

私は農業・大坪米造の六人兄弟の長男として出生、母ハツが早逝し、応召時は義母を迎えていました。家族は五歳違いの次男保広、長女チトセ、次女シゲ子、三女ミチ子（養母の連れ子）、三男行信（応召中出生）でした。

家は農家で田八反を耕作していましたが、徳益では大きな農家でした。ほとんどが小作で自作田が二、三反もあれば、ぐべん者（裕福者）と言われました。戦後農地解放で全部自作になりました。農地を他人に預けて戦争に行った者が帰って来て